

研究紀要の発刊に寄せて（創る授業の実現のために）

河北町教育委員会教育長 板 坂 憲 助

「河北中だより」（令和8年1月30日号）に「未来の授業を語る会～生徒が授業について考える～」の記事が載っており、その主な内容が「授業について自由に語り合う中で、今年度学校研究で取り組んできた『問い』『問い返し』という言葉が出たり、生徒自身が『受ける授業』から『創る授業』にしていきたいなどの言葉が出たり、有意義な時間になりました。」とありまさにこれから求められる授業像が話し合われたと感心したところです。

今、学校教育に求められていることは、子ども達に社会の変化に対応し生き抜く資質能力をつけることです。これまでの学習観、知識注入型で唯一解を求める授業パターンから、様々な事象と接しながら、課題を見つけその解決への道筋、構想を立て、協働的な学びを通しながら、最適解を求める学習能力が求められています。先の河北中生が求めている「受ける授業」から「創る授業」のことであります。

これまで我が町では、未来を生き抜く子ども達の学びの舞台となる“学校のあり方”について検討を重ねて参りました。今ある各学校の教室は、大正・昭和時代からの南向きに窓を配し、黒板を中心に一方向に机を並べて、教師の説明を一斉に聞く形です。今、私たちが取り組んでいる令和の日本型学校教育では、個別学習や協働学習、探究的な学習、最新のICT機器を備えた学習空間等、学習内容や学び方に応じて柔軟に対応できる学習空間でなければなりません。更には、子ども達の多様性に応えられる空間、いわゆる個別ブースやクールダウンスペース等が必要であります。他にも、防災機能を備えた学校、地域に開かれた学校、インクルーシブ教育を推進する学校、小中一貫教育が推進できる学校等、様々な面から考慮した学校整備に関する「基本構想・基本計画（案）」が策定されたところです。

子ども達にとってより良い教育環境、教育効果を最大限に引き出す未来永劫の学校づくりは、待ったなしの喫緊の課題であります。重要なことは、教師自身のこれまでの指導に対する当たり前や学校のあり方に対する当たり前を再考し、未来を見据えた新たな当たり前を創造することです。最後にご指導頂きました先生方や全所員の皆様に感謝申し上げますと共に、大いに語り合いながら生徒が望む教師と共に「創る授業」の実現を果たしたいものです。